

内容紹介

「ばあちゃん、無念だろう」。福島県楢葉町で30代続いた古刹の住職は、避難先で亡くなった老女の骨壺を預かり、その一生を思った。原発事故さえなければ、故郷で幸せに暮らせただろうに。他日、避難先の被害者に、東電から156ページに及ぶ賠償請求書類が届いた。賠償金は1人月額10万円。交通事故の自賠償をモデルにしたという。「ふざけんな!」。一方的な東電の賠償姿勢に怒った被害者は、住職を団長に集団訴訟を起こした……。いまや原告数は全国で8千人を超える。故郷を喪失し、戻りたくても戻れぬ人たちの怒りの行動を追う。

初出

朝日新聞 二〇一四年十月八日～十月十八日

※本文内の画像は、W E B用のものを転用しているため、解像度が低い場合がありますが、ご了承ください。

目 次

第1章 防護服で戻った寺

第2章 絵手紙が伝える今

第3章 まず謝ってほしい

第4章 戻りたい、戻れない

第5章 ゆがんだ町になるね

第6章 「反対ばかりしてる」

第7章 「喪失慰謝料」求めた

第8章 かみ合わない議論

第9章 すべてを汚された

第10章 かけがえのない場所

第1章 防護服で戻った寺

白い防護服姿の自身の写真が残る。

福島県楢葉町で600年以上続く宝鏡寺の住職、早川篤雄（はやかわとくお）（74）。

2011年6月18日朝、集合場所の福島県広野町の体育館にいた。

4月22日に立ち入りが禁じられた楢葉町内の「警戒区域」へ、一時帰宅する約120人のうちの1人だった。

バス6台が太平洋岸を右にみつつ国道6号を北上した。

寺は、福島第一原発から南に約15キロの大谷（おおや）地区にあった。周辺住民がバス1台に乗り込んだ。

久しぶりの帰宅。顔見知りの檀家（だんか）もいる。でも、みんな口数が少ない。

早川のひぎのうえには、唐草模様の風呂敷に包んだ骨つぼがあった。

檀家の女性の遺骨だった。

1週間ほど前に、避難先の東京で体調を壊し、77歳で亡くなった。

一緒に暮らしていた夫から連絡を受けた。読経もなく火葬された。

本来なら寺で読経し、墓に納めたいが、立ち入りさえまならない。

夫から「今は狭い家なので遺骨を預かってほしい」と相談を受け、数日前にいわき駅であずかった。

女性の一生に思いをはせた。

戦後、貧しい農家の次男に嫁いだ。夫は仕事で海岸の砂をスコップでかきあげ馬車で運んだ。出稼ぎに出ることも多かった。自分も日銭稼ぎをして子を育てた。ようやく幸せな生活をつかんだ。

ほがらかな人だった。

「ばあちゃん、無念だろう」

バスは住民を次々と降ろしていく。早川も寺の下で降ろしてもらった。

本堂に青の靴カバーをはいたままあがる。現実感がまるでなかった。

ご本尊の阿弥陀如来立像は避難先のいわき市のアパートの押し入れに移してあった。ご本尊が本来あるべきところの前にその遺骨を置く。

庭は雑草が伸び放題だった。放射線量を測って数値が高いのに驚く。

自分で30代目。寺を潰したくはない。だが、この女性のように避難先で体を壊して亡くなる人が続く。

政府は12年8月、この地を避難指示解除準備区域にした。でも若い世代は戻るのだろうか。

「寺が消滅するのではなく、地域が消滅する」

原発設置取り消しを求める裁判を長く闘った。今度は集団賠償訴訟の原告団長になる。

第2章 絵手紙が伝える今

福島第一原発の事故で「警戒区域」に指定された楢葉町の宝鏡寺。

その住職、早川篤雄（74）の妻、千枝子（ちえこ）（71）は、中学校の音楽の教師だった。

50年近く前、赴任した学校で国語を受け持っていた篤雄と出会う。

定年後は障害者施設で働くかたわら、下手でもいいからと聞いて、はがきに絵を描く絵手紙の手ほどきを何度か受けていた。

2012年8月に、寺のある地域は昼間、自由に入れるようになる。千枝子は避難先のいわき市から、車で日用品などを取りに戻った。

その年の秋。

寺のまわりなど、あちこちに、外来種のセイタカアワダチソウが黄色い花を咲かせていた。かり取ることができず、伸び放題だった。

コスモスの花も咲いている。

隣人が育てていたものが、たくましく花をつけていた。

事故の風化が進むなか、避難生活を送る自分たちの姿に重なった。

カメラに収めた。ふるさとのありさまを伝えようと、離れて暮らす娘に、写真をもとに絵手紙を描いた。

セイタカアワダチソウの黄色い花の下に赤紫のコスモスの花をおき、こう書き添えた。

「私たちを見失わないで！」

それから、町内の風景を写真に撮っては、絵手紙にした。思いつく言葉を絵のわきに書き込んだ。

クルマも人もいない道路の絵には、「みんなどこへ行ったの？」。

検問所を通るときの夫の姿を描いたこともある。そのときは、皮肉をこめて「ここはどここの細道じゃ」。

近くの木戸川とほととぎす山を描いた絵手紙には、童謡「ふるさと」の歌詞を添えた。「うさぎ追いしかの山　こぶな釣りしかの川」

慣れ親しんだ曲だが、避難生活を送るいま、歌うのも聞くのもつらい曲になった。歌詞の終わりに付け加えた。

「むかしのことよ」

ジャガイモやキュウリを育てた畑、孫とドジョウをすくった田んぼの堀、篤雄が桜や紅葉の木を植えた裏山。定年後に働いていた障害者施設のにぎわい……。すべて昔の風景になってしまった。

絵手紙は約60枚になった。

被災者の今を訴えようと、絵手紙の一部は印刷して売っている。売り上げは障害者施設の運営に充てる。

そんな千枝子と篤雄のもとに、東京電力から賠償請求の書類が送られてきたのは事故の約半年後。11年9月にさかのぼる。

第3章 まず謝ってほしい

その封筒はずっしりと重かった。

2011年9月中旬。

榎葉町・宝鏡寺の住職、早川篤雄（74）と、妻・千枝子（71）は、いわき市のアパートで避難生活を送っていた。

そんな2人のもとに東京電力から書類が届いた。避難に伴う損害を東電に賠償請求するための書類だ。

オレンジ色の表紙の請求書類は60ページ近くあった。水色表紙の、記入方法などを書いた案内冊子は156ページ。

篤雄は数ページめくっただけで、腹が立ってきた。

例えば請求書類の「送付時チェックリスト」はこんな具合だ。

「『ご避難の状況』の避難形態に応じた本請求明細の避難形態にチェックを入れていらっしゃいますか」

「請求対象期間と補償対象期間の両方にチェックを入れている期間のみ金額計算欄にご記入いただいておりますでしょうか」

こんなに細かいことを、すらすら書き込める者などいるだろうか。

実際、体裁は後に改められる。

請求書類には、一人あたり月額10万円という精神的苦痛への賠償金額が刷り込まれていた。

なぜ10万円なのか。知り合いの広田次男（ひろたつぐお）（69）ら弁護士に聞いた。

広田は避難を強いられて自死に至った渡辺はま子の原告側弁護士だ。

10万円の根拠は交通事故の自賠償保険なのだという。

政府の審査会が11年6月に基準を打ち出した。その際、自賠償保険の慰謝料を参考にした。

交通事故でけがをして入院した場合、月額12万円程度が支払われる。

なぜ、自賠償なのか。

避難者の声を聞いたのか。

ふざけんな。

篤雄は、この地で約40年にわたり反原発の運動をしてきた。国語の教師だったが、勉強会で原発の危険性を知る。1975年、教師仲間や地域住民と、福島第二原発の設置許可の取り消しを求める裁判をおこす。

原告団の事務局長を務めた。92年に最高裁で敗訴が確定したが、その後も、地震や津波で事故が起きるおそれを、何度も東電に申し入れた。

いつも無視された。

しかし、篤雄らの「警鐘」は現実のものになってしまった。

「反対してきたことは、何の役にも立たなかった」

東電の賠償姿勢に憤り、ふたたび裁判で闘う決意を固める。

まず謝ってほしい。今度は被害者としての訴えだった。

第4章 戻りたい、戻れない

2011年9月。

東京電力から送られてきた、同社に対する賠償請求書類。分厚く難解な内容に避難者の多くが戸惑った。

檜葉町からいわき市に避難していた金井直子（かないなおこ）（49）もその一人だ。

仕事にはげみ、家事もこなす。夫（49）や息子2人と暮らしてきた。

補償金請求書には「各補償項目の請求は1回限り」とあった。

出しているのか。他の人はどうするのか。不安がふくらむ。

そんな時、母（８２）が地元紙で弁護士の無料相談会を見つけた。思いきって１０月６日、福島地裁いわき支部の弁護士控室を母と訪ねた。

そこで応対してくれた弁護士が、広田次男（６９）だった。

東電からの書類を封筒ごとテーブルの上に置いた。

「先生、すぐに出さないといけないんでしょうか」

広田はあっさりこたえた。

「慌てて出さなくていい」

気持ちが少し楽になった。

金井は１９９６年、田舎暮らしにあこがれ、埼玉県所沢市から、母の実家のある大熊町近くの新葉町に、一家そろって越してきた。

０６年には「終（つい）のすみかに」と、戸建てを新築。落ちついたと思った矢先の震災と原発事故だった。

懸命に住まいを探し、１０日あまりで、なんとか、いわき市内の狭い借り上げ住宅に移った。

１２年８月。警戒区域の見直しで新葉町はいずれ「戻る」地域とされた。昼の立ち入りも自由になった。

時々、マイホームを見にいく。

だが、ちらかった部屋を片付ける元気が出てこない。カギを閉めて家を出るときが、むなしい。

原発は大丈夫なのか。汚染を気にしなくていいのか。

戻りたくても戻れない。

この理不尽さをどうにかしたい。

思いが深まるなかで、相談に乗ってもらった弁護士の広田が、多くの被害者救済に走る姿をみる。

弁護士と避難者の連絡役をかって出た。

広田を通じ、宝鏡寺住職の早川篤雄（７４）とも知り合った。

いわき市の仮住まいから早川のアパートまで歩いて数分だった。原発のことや過去の反対運動をきいた。

１２年１１月１４日。東電の賠償姿勢に納得できない人が原告団を作った。

原告団長は、反原発で闘ってきた早川が務め、事務局長には金井が就くことになった。

行動力が買われた。

第5章 ゆがんだ町になるね

榊葉町のマイホームから原発事故で避難を強いられた金井直子（49）。

東電の賠償姿勢に納得できない人たちが起こすことにした「福島原発避難者訴訟」の事務局長に就いた。

持ち前の行動力が買われた。

趣味でバンド活動をしている。

メンバーは榊葉町に住んでいた3家族7人。金井はコーラスとパーカッションを受け持つ。

楽しみは「いわき街なかコンサート」での演奏。2014年は10月18、19日にある。今度も参加するつもりだ。出れば11回連続となる。

メンバーとはPTAや子ども会で知り合った。それぞれ、夫の転勤などで榊葉町に居を構えた。

3家族ともいまは、いわき市などに避難している。気がねなく生活の不安や愚痴を言える仲だ。

ほかの2家族も、金井の誘いで避難者訴訟の原告に加わっている。

榊葉町は12年8月、警戒区域の見直しで、いずれ「戻る」地域に再編された。

戻るのか、別の地で生きるのか。答えが見つからない。堂々巡りだ。

バンドこそ続けているが、暮らしそのものが変わってしまった。

金井の夫（49）は高校の同級生。自動車ディーラーで働く。表に出ないが、後ろから支えてくれる。

避難後、ぼそりと言った。

「何のためにウチを建てたか分からないな」

14年夏。記者は金井とともに、榊葉町内のマイホームを見に行った。

06年に建てた家の外見はまだ新しい。地震にもびくともしなかった。

室内は11年3月12日に逃げた時のまま。本や衣類が散乱している。

夫が使っていたギターはほこりをかぶっていた。

13年春、東電は、この家に対する賠償請求書類を送ってきた。刷り込まれた金額は、避難しているいわき市で、新たに戸建てを買おうとすると全く足りなかった。

後に、政府の審査会は、避難先での住宅購入を支援するため、家屋への賠償増額を打ち出した。

楢葉町に戻る・戻らないの決断を迫られているように感じる。

町内には、除染廃棄物の黒い袋の置き場があちこちにできている。

金井はため息をもらした。

「ゆがんだ町になっちゃうね」

復興庁の14年1月の楢葉町民に対する調査では、「すぐ戻る」は8%、「条件が整えば戻る」が32%、「戻らない」が24%、「判断できない」が35%だった。

第6章 「反対ばかりしてる」

「福島原発避難者訴訟」の原告団長になった榎葉町・宝鏡寺の住職、早川篤雄（74）は、裏山に、長い年月をかけて桜や紅葉を植えてきた。

四季をめでた。

茶室を建て、脇に池をつくった。

炭を焼いた。

詩吟や尺八を楽しんだ。

米や野菜は自給自足できた。

養蜂で蜜がいっぱいとれた。

マツタケ採りの名人だった。

しかし、そんな生活は、原発事故で一変した。

いま、いわき市の2DKのアパートで妻の千枝子（71）と暮らす。

部屋には、自らが取り組んできた過去の裁判記録や、東京電力との交渉記録などが乱雑に積み上げられている。

それを改めて読み解いている。

今度の裁判のなかで東電にたたきたいのだ。

なぜ、この地に原発を造ったのか。

東電福島第一原子力発電所が2008年に発行した「共生と共進—地域とともに」という冊子のコピーを手に入れた。

東電が、大熊町に仮事務所を設けてから「45年のあゆみ」を記したものだ。

なかにある年表の、1960年の記述が目に残った。

原発の適地かどうか確認する作業が順調に進んだ背景として、「原子力発電所の設置を決めてから、入念な根回しを行った」とあった。

入念な根回し——。

楢葉町と富岡町に立地する福島第二原発も同じはずだ。

見つけた。67年の楢葉町議会の全員協議会の議事要旨に、県知事らの意を受けた町長らの発言があった。

「地元の盛り上がりが具体化したという形でなければならない」

東電や県側が町の側からの誘致熱をつくりあげていたのではないか。

高校の国語教師をしていた篤雄が、福島第二原発の計画を知ったのはその数年後のことだ。

75年に高教組の仲間や地域住民と第二原発の設置許可の取り消しを求めて提訴した。だが、84年の一審につき、90年の控訴審でも負けた。

裁判長は判決で早川らに言った。

「反対ばかりしていないで落ち着いて考える必要がある」「結局のところ、原発を推進するほかない」

最高裁でも92年、敗訴した。

篤雄は思う。

「あの裁判官たちは反省しているのか。わたしたちに何か罪はあったのか」

第7章 「喪失慰謝料」求めた

2012年12月3日。

「福島原発避難者訴訟」の原告団は福島地方裁判所いわき支部に訴状を出した。

原発事故の避難者らがおこした日本ではじめての集団訴訟だ。

これを皮切りに、事故で避難している人々が全国各地で提訴する。

第1陣には、原告団長の早川篤雄（74）をはじめ南相馬市と双葉、楢葉、広野3町の警戒区域から避難した18世帯40人が加わった。

訴状で「ふるさと（コミュニティ）喪失の慰謝料」という考え方を示した。

原告の避難者たちに共通する思いを、東京電力に対する訴えに反映させようと、弁護士たちが打ち出した考え方だ。

11年初秋にさかのぼる。

東電が避難者たちに賠償請求の案内を始めた。

このころ、避難者の相談に応じていた弁護士の広田次男（69）や米倉勉（よねくらつとむ）（56）たちは、新たな慰謝料の考え方が必要だと感じていた。

1人あたり月額10万円。東電が、精神的苦痛への賠償として示したものは、考え方も、示し方も、結果として金額も、納得できない。

放射能汚染の実態が明らかになる一方、一時帰宅で、朽ちていく自宅の惨状を目の当たりにし、たとえ、いつの日か避難が解除されても、元の生活はもう戻らない――。

こんな「ふるさとを失った」慰謝料の賠償を求めていくことにした。

問題は、具体的にどう訴えるか。いくらの慰謝料を求めるか。

もちろん前例はない。

グムの造成だと隣の地区に集団移転が可能で、ばらばらになった原発事故の避難者と同じとは言えない。騒音公害も部分的な生活の破壊だ。

たどり着いたのが、交通事故の裁判の賠償額の基準。死亡慰謝料の最低が2千万円だった。

原発事故の避難者も、積み重ねた人生を奪われたという意味で、同様に考えられるのではないか。

大きなヒントになったのが、強制隔離された元ハンセン病患者127人が起こした訴訟だ。1人1億1500万円の支払いを求めた。

熊本地裁は01年5月、入所期間などに応じて800万～1400万円の賠償を認め、確定した。

「ふるさとを追われたということでは同じではないか」

弁護団は、避難者にも確認して最終的に「喪失慰謝料」を1人あたり2千万円と決めた。

2013年10月2日。

「福島原発避難者訴訟」の第1回口頭弁論が開かれた。原告と被告の法廷での論戦がスタートした。

福島地裁いわき支部で、いちばん広い1号法廷の44ある傍聴席は、原告らでいっぱいになった。

さっそく原告団長の早川篤雄（75）が意見陳述に立った。

いつもの黒の作務衣姿。堂々とした声が法廷にひびく。

「生活の糧となってきたこと、使命と思ってきたこと、心のよりどころ、喜び、楽しみ、生きがいのすべてを一瞬にして奪われました」

「（元の家に）戻らないという人々は今後増え続ける。私のお檀家（だんか）でも事故以後2軒、お墓ごと寺を抜けていきました」「どう考えてもふるさとは、元に戻ることはない、ふるさは消滅したという思いです」

続いて原告団事務局長の金井直子（49）。途中で涙声になった。

「地域での暮らし、地域のコミュニティそのもの、ふるさとそのものを失い、現在も原発事故からの避難生活を続けているのです」

「今の榎葉町は、除染と原発事故復旧の前線基地と化し、元の穏やかな温かい町ではありません」

東電はどういう姿勢か。

弁論前の13年7月31日付で裁判所に出した答弁書では、こう述べる。

「原子力損害賠償法3条1項に基づき、原子力損害賠償紛争審査会の定める指針に従って、賠償に応じる方針である」

要するに、原発事故で避難した人々の損害に対する賠償は、法律で、過失があろうとなかろうと、事業者が払うことになっている。だから、過失の審理は必要ないし、賠償金は指針に従って払う、という主張だ。

原告が聞くと、自分は悪くはないが、法律と国の指針があるので支払う、といっているように感じる。

それでは納得できないから、「ふるさと喪失」慰謝料として、1人あたり2千万円を求めている。

同じ思いで後に3次にわたり原告が加わり、計473人になった。

だが、議論はかみ合っていない。

14年6月の第5回口頭弁論。裁判長は尋ねた。「原告全員に共通する事実は何があるのでしょうか」

弁護団の米倉勉（56）が返す。

「ふるさとから避難を余儀なくされ、もう戻ることはできない。その総体を被害だと言っている」

原告団は、それをわかってもらうためにも、裁判官に現場を見ることを求めている。

第9章　すべてを汚された

原発事故で避難を強いられた人たちが、東電を相手に、「ふるさと喪失」の慰謝料を求めた裁判。

第2回口頭弁論は2013年11月27日に開かれた。

この日は福島地裁いわき支部の法廷に、早川千枝子（71）が立った。原告団長、早川篤雄（75）の妻だ。

事故前後の変化を語った。

教師を退職後、榊葉町内の障害者の施設で働いていた。60歳を超えてからの挑戦。新しい仕事に生きがいを見いだしていた。

ところが、大震災翌日の11年3月12日朝。町の防災無線が、いわき市に避難するようにと伝えた。

あわてて、障害者12人と避難した。体育館で支援物資のおにぎりをみなで分け合い、体を寄せ合って温めあった。

しかし、混乱が続く中、一緒に避難した、てんかん患者が亡くなった。市内の病院はほとんど休診で、薬が合わなかった。

「避難生活さえなければ、今も榊葉の地で元気にいられたと思うと、とても悔しいです」

実母（当時90）も避難先を変えるうちに体調を崩し、肺炎で亡くなってしまった。

「失ったものは、大切な人たちだけではありません。私の思い出や生きがい、平和な暮らし、そのすべてを放射能で汚され、取り戻すことができなくなってしまいました」

努めて冷静に語った。

事故のことを人前で話すと、いつも泣いてしまう。だから、泣かないように情景を考えないようにした。

遊びに来た孫（12）と撮った写真も意見陳述書に添付して示した。

1枚は田植えの風景だった。機械に興味津々な孫が、篤雄の座る田植え機に上がった姿が写っている。

意見陳述では、そこまで話さなかったが、その田にはいま、除染した土を詰めた黒い袋が並ぶ。

置き場がなければ除染は進まない。除染が進めば、いつかまた田植えができるかもしれない。夫婦で話し合い、田を提供することにした。

陳述の後半。昼間の立ち入りが自由になり、孫が一度だけ墓参りに来てくれた時のことを語った。

暑い日だったが、長袖、長ズボンをはかせた。

「土や水を触ってはだめだよ」。そう言い聞かせた。

「孫の戸惑った様子を見て、涙が出ました。私の築き上げてきた大事な故郷はもうここにはないんだと思わされた瞬間でした」

第10章 かけがえのない場所

両手を後ろに、天をあおぐ。

その石像は気持ちよさそうだ。

「福島原発避難者訴訟」原告団長、早川篤雄（75）が住職を務める檜葉町・宝鏡寺。

裏山をのぼったところにある小池のわき、50センチほどの石像がある。

早川を模したものだ。

国語の教師だった。兼好法師の「徒然草」の一節が好きだ。

「存命（ぞんめい）の喜び、日々を楽しまざらんや」

秋、その小池には赤い紅葉の葉が落ちた。

そこで中秋の月をながめる。

わきには一升瓶。

そんなように私は人生を楽しんだ、と残したい。それに、亡き後もここで月を楽しめたら。

7、8年前、そう思い立つ。

費用が安いと聞き、中国・アモイ市に飛び、「こんなポーズに」と注文した。

だが、原発事故で今は、原告団長として忙しい日々を送る。

月を気楽にながめる余裕はない。

何より、まだ避難生活がつづく。

デモ行進では先頭に立つ。

避難先では東京電力の責任を迫しようと、資料を読みこむ。

同じ弁護団が手がける、いわき市民による集団訴訟も傍聴する。事故で平穏な日常生活を奪われたとして慰謝料などを求めている。

早川は、頼まれて避難者の今を語るとき、「ふるさとを失った」ことをどう伝えるか、で悩む。

「私だと、ここに生まれ、今日まで生きてきた、となる。言葉にすれば、それだけだ。でも、ここを追い出された人々には、みな、それぞれの、ふるさとはあったんだ」

「避難者訴訟」はこれまで6回の口頭弁論が開かれた。

「公害事件で現場を見ないままの判決はありえない」と、原告は早期の現地検証を求めるが、裁判所はまだその判断をくだしていない。

東電広報部は「避難者訴訟」に関してのコメントを寄せた。

「訴訟内容に関することについては回答を差し控えさせていただきますが、引き続き、訴訟において、ご請求内容やご主張を詳しく伺ったうえで、真摯（しんし）に対応してまいります」

原発事故の避難者や被害者の集団訴訟は、全国で少なくとも17の地裁・支部に及び、原告の数は8千人以上になる。

プロメテウスの罠〔５５〕 ふるさと訴訟「戻りたくても戻れぬ理不尽」

著 者 朝日新聞（小森敦司）

発行所 朝日新聞社

〒１０４－８０１１ 東京都中央区築地５－３－２

<http://www.asahi.com/>

発売所 朝日新聞社デジタル本部

〒１０４－８０１１ 東京都中央区築地５－３－２

<http://www.asahi.com>

２０１４年１２月４日 WEB新書版発行

２０１５年１２月３１日 EPUB版発行

©2015 The Asahi Shimbun Company

All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

ISBN 978-4-86612-574-9

〈ご注意〉本コンテンツは、購入者個人の閲覧目的のためのものです。私的範囲を越える利用・譲渡などは禁止します。

〈おことわり〉本コンテンツは２０１４年１２月４日に刊行されたWEB新書版を底本としました。EPUB版の刊行にともない、体裁や表記を直した場合があります。企業、組織などの名称、人物の役職、肩書等はいずれも記事初出当時のものです。